

崩壊3rd？ああ、最初から死亡フラグ満載のあれね(白目)

(ホモじゃ)ないです

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

この二次創作を描いた理由

??

崩壊3rdの二次創作を読みたい！

←

ファツ!?! 少なスギイ！

←

よっしゃ書いてやらあ！

と、いう完全な趣味に走って作った作品です。

駄文、駄作、ばっちこい！て人以外は見ない方がいいかと、  
エタらない程度にがんばりまふ。

# 目次

ハジマリ	
このクソツタレな世界の中で	1
クソツタレな世界は	4
クソツタレな世界ヲ	9
ホウカイ	
アタラシイ世界	13

## ハジマリ

### このクソツタレな世界の中で

世の中クソだ、そう思っただけ生きてきた。

努力は報われず、理解者はおらず、応援してくれる人もいなく、

心安らぐ場所もない、何も頼れない。

昔の友達とは連絡をいれても反応がなく、

そもそも番号を変えているのか繋がりもしない。

こんなことを言っているとこれまでになにか悪事を働いた人と思うかもしれないが、私  
は何も悪事を働いていない。

成績は悪いわけでもなく国立〇〇大学医学部を主席で卒業しており優秀、他にも  
趣味で機会学や薬学、地学や歴史、物理学などでも大学の教授レベルであり、学力は  
あると言えるだろう。

尚且つ素行面でも何一つ悪くはない。むしろボランティアとして地域のために動い  
たり、慈善活動を行ったりしている。

小学校、中学校、高校、大学と全てを完璧にこなしてきた。

しいて言えば、就職に関しても様々な分野のお偉いさん方からの誘いが来たが自分の夢である医者になるためにそれらを全て断つたものくらいだろう。

その程度で恨みを買うことはないだろうしここまでではならない。

そのとき、何か頭の中に声が響いた気がした。

~~~~~

なぜか最近、影が薄くなってきたような気がする。

そしてその度に、何か変な感覚を感じることがある。

その感覚は最近になって顕著になってきている。

最初は話しかけても少し相手が返答するのが遅かったただけなので気にしなかったが、

今ではコンビニの自動ドアが3回に1回は認識をせず、話しかけても7割くらいが無

視される、そんなことがここ最近ずっと続いているのである。

ここまでくると何かおかしいと思うのが普通であろう。そこでこの感覚をなんと表

すべきかと考えた時に、『自分という存在がこの世から消えて行く感覚』

が一番しっくりくるのでそう呼んでいる。

このまま自分はどうなるのだろう。

~~~~~

あれから1週間経った、またここ最近になって新たな変化が現れた。ときどきだが視界が切り替わるのだ。

今生きている現代からどこか荒廃している場所へ、

最初に見えた時は今いる場所と全く関係ない場所だった。

しかし、つい1日前に今いる場所と荒廃している場所が被ったのだ。

病気が何かかかと思つて病院にも行つたが特に異常はなかった。

脳の検査も行つたが大丈夫だった。

今は仕事にはこの切り替わる(？)目のせいでてんで手をつけられず、しかたなく家にいる。

はあ、ほらまた視界の中の景色と現実が被った、いったいなんなのだろう。もう今日は寝ることにした。





ナニかの肉のヨウナモノが入っていた赤黒い液体ダツタ

それを見てそう判断するのに数秒、さらに完全に理解するのに数秒かかった。

ソレは赤黒かった、ソレは骨のようなものが含まれていた、ソレは指の様なモノも含まれていた、ソレは目のようなモノもあつた、ソレは、ソレはソレハそれハ s おれ h a  
s r e は a

ヒトノニクノヨウナモノダツタ

それを理解した脳は理由を探し始めたそれを理解した体はカラダのナカに残っているような気ガスルソレを吐き出そうとしたソレを理解したメハ熱くナツタソレを理解シタハナはニオイを嗅がナイようにシヨウとしたソレを理解シタソレを理解シタソレヲ理解シタソレヲリカイシタソレをかいいたそれをりかいした

ソ  
レ  
ヲ  
リ  
カ  
イ  
シ  
タ





サア、ゲームヲハジメヨウ



アア、ダレカキタ、コノジョウタイデミツカルノハマズイ。

ナラバ、イマハマトウ、イママデモマツタ、イママデノアノジカンヨリマシダ。

サツソクカラダヲカツヨウスルトキガキタヨウダナ、アリガタクツカワセテモラウ

ゾ、

ヤドヌシヨ

~~~~~  
 ??? 「誰か！誰かいませんか！」

誰かが叫んでいる、、、なんだろう、、、、、、、、

そもそも俺は誰なんだ、、おreは、、誰なんだっけ、、、、

ここは、何処だ？、、、、、なんで俺は倒れてるんだ？、、、、、、

動けない、、、何故だ、、、、、、

??? 「誰か！、、、、、、ツ！」

誰かが近づいてくる、、誰だろう、、、、わからない、、、、

??? 「大丈夫ですかっ!？」

大、上、、夫？何が大丈夫なんだ？、、、、頭が、、、、痛いな、、、、

??? 「しっかりしてください！意識を持って！」









「、、、、、、誰ですか？、、、、」

??? 「はい？、あ、私ですか？、私は芽衣と言います。」

「芽衣、さん、ですか？、、、、ここは？、、、、」

芽衣 「ここですか？ここは、「芽衣、誰と話してるんだい？」あ、艦長！」

、、、、艦長？、、艦長つて、、船の？、、、、

「、、、、あの、、貴方は？」

艦長 「ああ、私は艦長と言われている人さ、名前はない。」

？、、、、名前が無い？、、、、どういうことだ？

アア、ソウイウコトカ、オモシロイ、！

ツ！、、、、さつきからなんだ、、この声は、、、、

艦長 「、、、、どうしたんだい？大丈夫かい？」

「あ、、、、はい、、大丈夫です、、ただ頭痛が、、、、」

艦長 「頭痛？、、、、今はどうだい？」

「、、、、さつきよりは、マシ、、、、です、、、、」

艦長 「そうかい？辛くなったりしたらそのボタンを押してくれ。」

「わかり、、、、ました、、、、」

艦長 「うん、じゃあ、芽衣、キアナが呼んでたから会ってあげてね。」

、、キアナ?、、誰だ?、、、、

アア、アノイマワシキリツシヤカ、、!

、、キモチワルイ、なんだ、さつきから、、それに、、律者つて、、、、なんだ?、、

芽衣「キアナちゃんか?、、何でしようかね?」

艦長「さあ、わからない。けどそこまで重要な事じゃないと思うよ。」

芽衣「?なんでそう思うんですか?」

艦長「キアナがそこまで急ぎじゃないって言ってたからね。」

芽衣「ああ、、なるほど。わかりました。」

.....

2人が出ていった病室では1人の男が状況を整理しきれていないで取り残された。その口元は嘲笑っていた。

それを その男自身も 理解していなかった